

序

ヤノマムの歴史と その文化背景

<ヤノマムの人びと>

ヤノマム族のいわれ ヤノマム族というのは、ブラジル語で Yanomamö、英語で Yanomama と書く。ヤノマムというのは大きくわけて2つの意味が考えられる。1つは彼らインディオのことをヤノマムといい、我われやブラジル人、アメリカ人などはヤノマムとは呼ばない。もうひとつは、彼らの近くにいる人をヤノマムと呼ぶ。たとえば我われが彼らとともに生活をすれば、我われもヤノマムとなるのである。つまり、ヤノマムとは人間という意味なのである。我われが彼らに、ヤノマムの絵をかいてくれと言えば、男性は男の絵を、女性は女の絵を書いた。

地域と人口とことば 彼らが生活するのはブラジル・アマゾナス州・ネグロ河上流域および、ローライマ州・ベネズエラ国境域である。彼らは現在約1万人余いと推定される。ことばについていえば、ブラジル原住民の言語は大きく分けて、TUPI-GUARANI, JÊ, KARIB, ARUK という4大語族に分けられるが、ヤノマム族はそれ以外の系、すなわち、その他というグループに入る。

生活 彼らにとって重要なことは食べることである。その手段として、狩猟、漁撈、農

耕というものが現在おこなわれている。近年シリアナの部落には銃が入ってきているので、狩猟には従来の弓矢とあわせて使われている。狩猟は男の仕事、漁撈は男女、農耕はおもに女性を中心となる。最近では農耕の比重が高まっており、焼畑によりバナナ、マンジョーカ、ポボンヤなどがえられる。こうした収穫物を運んだりするためのバスケット類も多量に作られている。食べることを以外の楽しみのひとつに、歌とダンスがある。バナナやポボンヤの収穫期には1週間にもおよぶ大きな祭りが行なわれる。この時は、何百kmも離れた地域よりインディオ達が集まってくる。

彼らの家屋は、ドーム型の共同家屋で、ひとつの部落にすべての成員が寝起きをともにしている。こうした成員は、たいていの場合、血族で結びついている。そのため、親族単位で行動することが多い。

戦争 66年以降より部落間の戦いはなくなっている。しかし、以前はインディオ部落間の戦争は多く、今日でも、ローライマ州のスルクとアマゾナス州のマラーリでは非常に戦闘的だという。シリアナ族においても、過去にはシリアナ族ロベルト部落の首長や、同フィアーリョ部落のホキホキなどは何10人もの人間を

殺したとして恐れられている。このように過去には戦死者が多く、父なし子も多かった。

病 気 近年、文明人との接触が多くなり新しい病気などで、病死する例が多くなってきている。とくに幼児の死亡では、アメーバー赤痢、百日せき、はしかなどによる死亡、また成人ではマラリヤ等の高熱による死亡例が多い。以前、シリアナ部落では集団ではしかにかかり、20名以上死亡した。その中には直りかかっている者も数名いたが、信仰のためか何も食べないで餓死したそうである。また、ポスト・アジュリカバ(インディオ保護局出張所)では近年、結核も入ってきている。つまり、彼らの風土病に、文明人らが持ち込んだ病気が重なり死亡している例が見られる。これには文明人と接触の機会が多い、ポスト・アジュリカバなどにインディオが下った時に、病気をうつされて、それを各部落に持ち帰ったものもあると推定される。

身体の特徴 男子成人ではほとんど、身長が150cm~160cmぐらいである。170cmを越す人は1人も見られなかった。女子成人では140cm~150cmのあいだに含まれる。女子で160cmを越す者は見られなかった。体重は男子では50kgを中心とし、70kgを越すと思える人はいなかった。女子もまた50kgを中心としている。男女で身長差に比べて体重差は極めて少ない。数例しか具体的に測定していないが女子成員のバストの平均は90cmに近いものと思われ、ヒップも90cmはあるものと考えられる。男子は日本人よりひと回り小柄であるが体格はがっちりとしている。女性はどちらかというとグラマラスな者が多く、ずんぐりとした印象を受ける。

髪は直毛であり、波状毛と思われるものは極めて少なく、巻縮毛、巻毛、縮毛といったもの

は見られなかった。髪型は、我われがインディオカットと呼んだおかっぱ型にほぼ統一されている。

鼻は中鼻というよりはむしろ広鼻の部に入っているのではないかと思える。日本人とよく似た鼻と違ってまらがない。

目の色は黒色で、まぶたは男が一重で、女に二重が多いようである。唇は厚くもうすくもない。体毛は日本人同様で、ヒゲをはやしている男性もいる。女性の恥毛については、抜いている女性もいれば、そうでない者もいる。

＜文明人との接触＞

FUNAIとの接触 FUNAI(FUNDAÇÃO NACIONAL DO INDIO=インディオ保護局)による接触が始まったのは、1945年にFUNAIがトットビ河(Rio Tototo bi)に入った時が初めてのことである。その後、1947年にマブラウ河(Mapulau)、そして1954年に初めてのデミニ河(Demini)の中流にFUNAIのPOSTO(出張所)が建設されたのである。ここがポスト・アジュリカバと呼ばれるところである。FUNAIは年3回くらいの割りでここを経由してヤノマムの部落に入り、FUNAIからの物品と、インディオたちからの毛皮などを交換したりしている。我われは、ポスト・アジュリカバの責任者であるEsmeraldino Ailao Neves氏に親密な関係で多大な理解と協力を得ることができ、ヤノマムの部落に入ることができた。

ミッションとの関係 今日、多くのカソリックとプロテスタントのミッションがインディオとの接触をはかっているが、我われが多大の協力を得たのは、プロテスタントのEvangelicalというグループであり、これはリ

オ・デ・ジャネイロにブラジル本部を置き、マナウスに支部を置くところのアメリカ系のグループであり、New Tribe Mission と呼ばれている。彼らは目下のところ、なによりもまずインディオと親密になることを目指している。この地域に初めてこのグループが入ったのは1958年にKeith Wardlaw氏が初めてで、その後1960年にan氏が入域した。ミッションが本格的にこの地域において活動できるようになったのは、1965年にトトビ河のシリアナ族のロベルト部落の近くに飛行場を完成させてからである。現在では約1カ月から2カ月に1度は、彼らミッションの家族が使う生活用品を軽飛行機に積んでやってきている。



／Esmeraldino Ailao Neves氏。マナウスFUNAIの職員。我われは「エスメラジン」と呼び、彼は「ヨー」「フシモート」「スタ」などと呼び、兄弟同様のつきあいだった。明朗快活でユーモアに富んだ25歳の青年。また真面目に「保護」の仕事に打ち込んでおり、将来、奥さんを教師としてポストに住ませたいと夜学に通わせている。

保護政策のもとで このヤノマム族は非常に温和で、表情の豊かなインディオである。彼らが外来人に対し敵意を示さないのは、彼らが白人などからこれまでに迫害を受けていないからだとも言えるであろう。

この地域にはFUNAIでないと入れないし、また、ブラジル人さえもネグロ河上流域にはほとんど住んでいないという状態で、彼らの生活圏がほとんど脅かされなかったためと思われる。さて、このヤノマム族が本格的に調査されたのは、米国・ミシガン医科大学のNapoleon Chagnonを隊長とする調査隊で、1967年～68年にかけて、ベネズエラ側を中心にヤノマム族を調査したのが初めてである。



／Hartman氏夫妻(左)とWardlaw氏夫妻。シリアナ・ロベルト部落駐在の宣教師。ヤノマムのことばをベラベラ話し、最大の情報提供者兼通訳。皆さん親切で食事や仕事場などの世話になった。Dorothy Hartmanさんは日本語を話せ、彼女との会話においては英、日、伯、ヤノマムの4種のことばが乱れ飛ぶ。のち、マナウスでソフトボールの試合などをし、大いに交歓した。

ヤノマム族をとりまく自然

——部落へのアプローチ

<気 候>

アマゾン河流域といえば、熱帯雨林気候の代名詞とされるほどその特徴を顕著にあらわしている。熱帯雨林気候(Af)の特徴とされているのは、年中高温多雨で気温年較差は小さく、気温日較差が大である。また1日の気温変化は1年間の変化よりも大きい。そして、天気の変化は、単調で規則正しい。たいていの場合、1日のうちの特定の時間、特に昼から夕方にかけてなどスコールに見舞われる。降雨量の季節的配分においては、いわゆる雨季はマナウス(南緯3°)では12月～5月にかけてである。これにより乾季は6月～11月までとなる。降雨量は年間を通じて4000mmにもおよぶが、乾季における降雨量は500mm程度である。スコール時における降雨量は50mmに

も達することがあり、その時は水道の栓でも全開したかのような雨が降る。マナウスで観測したところによると日較差はさほどではなく(せいぜい4°～5°C)であるが、シリアナ部落において最大差9.5°Cを記録した。

このシリアナ部落(北緯3度、海拔200m未満)においても熱帯雨林気候の特徴を示しているわけであるが、同じ気候区であるマナウスよりは比較的過ごしや

すい。ただ日較差が、市街地であるマナウスよりは、はるかに大きく、最低10°Cをわることもまれにある。夜など我われは服を着、寝袋に入って丁度といった具合である。日中、ジャングル内は太陽の光がささぎられ、じめじめとした感じではあるが、部落内部および部落周辺の太陽のあたる地帯においては、湿度は比較的少なく過ごしやすい。別表からも分かるように熱帯雨林気候区内としては湿度は少ない方である。これは、ジャングル内での測定値ではないのでこういう結果になったのかもしれない。しかしこれとは逆に、温度の面からいえば部落内部および周辺、ジャングル内では1～2°Cジャングル内の方が低くなっている。("住", 参照)

概していえば、彼らの生活圏の地域は、我わ



れが熱帯雨林気候という言葉から想像するものより、はるかに過ごしやすい気候である。

<河>

▷ネグロ河 Rio Negro

アマゾン河の中流、マナウス市のあたりでアンデスに向かうソリモンエス河(本流)と別れ北西にのびる。ネグロ河はその名のしめす通り「黒い河」で、熱帯特有の濁った河のイメージとは違い、うすいコーヒーのようで、透明度は高い。長さにおいては、ソリモンエスに劣るがそのスケール、河幅においては、まさにこの河が「アマゾン本流」である。最大幅は30kmにもおよび、その中に無数の島々が浮かび、熟練した船乗りでさえも、その無数の水路に迷い込むと、永久に出られないという。「白い河」リオ・ブランコとの合流点では、黒と白の境界線があざやかにみえる。ここから北北西に向かいベネズエラ領に至る。

▷デミニ河 Rio Demini

ネグロ河流域の町—バルセロスの対岸より北



上空から見たネグロ河。
蛇行と三日月湖のいりくん
ださまがよくわかる。

上している全長約450kmの河で、ネグロ河の支流になる。河幅は広いところでは約150mに達するが、最も狭いところでは、10mぐらいしかない。ネグロ河から、このデミニ河に入ると、急に河底が浅くなり、水深が1m前後の所が多くなる。FUNAIのポスト・アジュリカバは、さかのぼること約250mの地点にありそこからさらに上流は河幅、水深ともわずかになり、減水期には河幅30~50m、水深1~2mで、増水期には河幅は5~10m増す。また、瀬も多くなり、この付近から岩盤が水面上に姿を出しはじめる。このデミニ河は蛇行をくり返し、ポストから約100kmの地点でマブラウ河と、またそれより30km地点でトトビ河とわかって、自身はブラジル・ベネズエラ国境の分水嶺にいたる。

▷トトビ河 Rio Tototobi

デミニ河支流のトトビ河は最大幅約30mで、すぐに河幅約2m~10mになる。木々が河の中に倒れていたり、枝がはみ出していたりしている個所が多く、マシャー(オノ)やテルサード(山刀)を使って切り落としながら、あるいは、頭を低くして、かきわけるようにして通過していかなければならない。トトビ河は全長100kmでブラジル・ベネズエラ国境に源を発する。

<動物たち>

アマゾンには猛獣が少なく、ネコ科の動物はオンサ(ジャガー)、マラカジャ(大ヤマネコ)がいる程度である。霊長類はきわめて多く、また多種をきわめ、ジャングルの中で群れに出合ったりする。大型獣はまずアンタ(バク)をあげねばならない。またネズミの仲間で豚ほど大きいカビバラ(ミズブタ)もおもしろい動物だ。



黒ピラニアをもつFUNAIの職員。

ほかには、アクリイ、アルマジロ、カチート（野ブタ）、ヴィアド（鹿）などがいる。

鳥類では、最大のインコであるコンゴウインコなど、色あざやかなインコ類が多く、奇声を発しながら、つねにつがい飛ぶ。野ガモ、かけす、ハチドリなどを見かけ、モットン（ワイルド・ターキー）はよく食される。

カメには水棲と陸棲があり、大きいものはゆうに1mを超す。ワニやスクリジュ（アナコンダ）という大きな水蛇は船から見かけられることもあった。

アマゾンには2000種以上の魚類が棲むといわれるが、あまりに狂暴な魚として知られすぎたピラニアやピラララ（大ナマズ）、アロワナ、ビランジャ、ピラルク、それにボート（アマゾンイルカ）などをよく見かけた。また電気ウナギやエイもまれに見られた。

しかし何といても、我われに対して最大の歓迎をしてくれたのは、昆虫類、とりわけ我われに痛みとかゆみをもたらしたものである。ビュン（ブユ）は昼のあいだ、体のまわりに数10匹がたむろし、血を吸うのである。アリは無差

別にかみ、砂ノミは足の裏の皮下に潜り、おのれの数倍もの卵を生みつける。また、時々ではあったがハチの歓迎をうけたこともあった。

いままで、あまりに興味本位に書かれすぎ、また、悪魔の化身のごとくいわれた、ピラニアをはじめとするアマゾンの動物たら一彼らは、この地域の生態系を構成する重要な存在であり、そしてヤノマムの人々にとって、貴重な食糧なのだ。

上空から見る森林のようす

